2019年8月号 第174号 毎月1日発行

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/

シリーズ 第111回

大陸に渡った少年たち

―満蒙開拓青少年義勇軍―

昭和七年（一九三二）、中国東北部に「満州国」が建設されると、国の政策により集団移民が推進され、多くの人々が大陸に渡りました。こうした人々を一般に「満蒙開拓団」と言います。満蒙開拓団は、昭和一二年（一九三七）に日中戦争が始まり、多くの壮年が兵士として招集されると、やがて兵役にかからない青少年が対象となり、数え年一六～一九歳の青少年で構成される「満蒙開拓青少年義勇軍」の募集を始めました。学校では、国民学校高等科の指導要領の中に「満蒙開拓義勇軍」の項目が設けられ、校長や教師が児童生徒に義勇軍への勧誘を行うよう求められました。

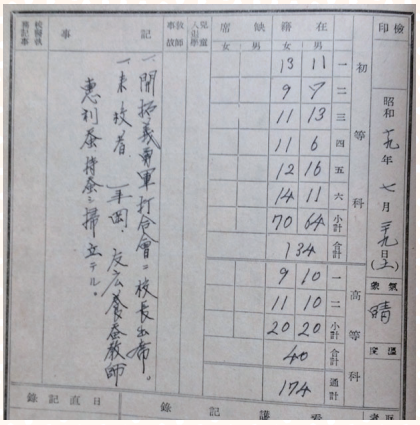
『満州開拓史』による岡山県から大陸に渡った青少年義勇軍は二八八八名とされ、都道府県別で第九位とかなりの数です。県内の内訳は、郡市別では川上郡が最も多く、次いで上房・真庭・苫田・久米と県中北部が特に多いようです。人数は各資料により若干の違いがありますが、泉村の行政文書によれば、鏡野町域からは二八名が送り出されています。

写真の前列に並ぶ四名は、泉国民学校から青少年義勇軍に入隊した少年達で、左から竹本美作男、田中重治、赤坂勉、西村寛です。彼らは昭和一九年（一九四四）二月二三日に茨城県内原村（現茨城県水戸市）にあった内原訓練所に入所し、岡山県出身者で構成される村上中隊に所属して、一定の訓練を受けた後、五月二三日に新潟から満州に渡り、勃利訓練所（現黒竜江省）に入所しました。写真右端に写る福島寛（旧姓西村）さんが当時の思い出をまとめた手記を平成一五年（二〇〇三）の「広報おくつ」に投稿されていますが、これによると、村民総出の壮行会が行われ、沿道の人々や先生をはじめ全校生徒の見送りを受け出発したようです。勃利訓練所では、開墾作業や教練を行い、終戦前には工場などでの労働に従事しました。

そして昭和二〇年八月一五日に終戦を迎えると、国家の後ろ盾をなくし大陸に放置同然となった少年達の壮絶な日々が始まります。赤坂・西村が勤務していた満州飛行機会社は、終戦後、隊は解散、それぞれがバラバラに生活し、現地の人の家へ働きに行くなど、わずかな賃金の仕事に従事しながら酷寒極貧の環境で命をつなぎ、翌年七月に葫蘆島（遼寧省）から引き揚げ船で無事帰国することができました。福島さんの手記によれば、西村少年は帰国まで中隊長と同居させてもらい、わずかな賃金で生活し「生きることの難しさを思い知らされた一ヶ年でした」と綴っています。

一方、文官屯の工場で終戦を迎えた田中・竹本は、約二ヶ月雑役を行った後、炭鉱労働に従事、その間の二月に竹本少年は寒さの中、栄養失調で亡くなりました。田中少年は昭和二一年八月に竹本少年の遺骨を持って帰国しています。

竹本少年に限らず、満蒙開拓団は、終戦後ソ連軍や中国共産党軍、現地人らの略奪や殺戮、飢えと寒さの中での逃避行で、多くの人々が帰国できないまま亡くなりました。村中総出の見送りを受け、華やかに出発した青少年義勇軍の末路はあまりにも過酷でした。こうした少年達までもが国家の政策によって犠牲にならざるをえなかった「戦争」という行為は、二度とあってはならないことを心から痛感します。



香北小学校日誌には、開拓義勇軍の打ち合わせに校長が出席したことが書かれています。

泉国民学校から入隊した少年達

参考：『岡山県史』近代Ⅲ、『岡山県郷土部隊史』、『奥津町史』、「広報おくつ」平成一五年一二月号

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733